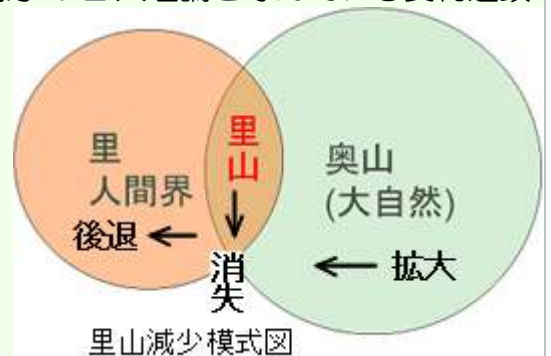


活動分野	森に親しむ講座		
タイトル	ことわざや名句にみる森林と樹木		
実施日時	平成28年9月29日(木) 10時～12時		
実施場所	千葉市 千葉市文化センター		
受講者	56名	FIC会員他スタッフ	16名

活動の内容

「あとは野となれ山となれ」、只木良也 名古屋大学名誉教授の著書「ことわざの生態学」を種本にしたこのことわざを筆頭に、森林と樹木の仕組みについて、私の気に入っている言葉をもとにスライドを使って説明をした。取り上げた内容は次のとおり。

①「あとは野となれ山となれ」、『野となれ山となれ』の順番に着目して野(草原)から山(森林)に移り変わる植生遷移について解説。続いて、私が勝手に生態学の2大理論と呼んでいる食物連鎖に触れ、さらに、近年の車社会の進展による奥地と里との生活格差の増大から奥地の人家の移転、消失の進行に伴い人間と自然との緩衝地帯の役割を果たしていた里山が減ったために、イノシシ、シカなどの野生鳥獣被害が増えたことを説明。



②「あらたうと 青葉若葉の 日の光」、奥の細道で日光の二荒山神社を訪れた芭蕉が登るにつれ木々の葉が青葉から若葉に変わっていく様子を読んだ句から、植生の垂直分布について解説。

③「在地願為連理枝(地にあっては願わくば連理の枝とならん)」、白居易(白楽天)の長恨歌の一節から連理の枝を取り上げ、同種の植物間ではお互いの細胞がくっつき癒合することがあること、しかし、この現象は異種間では起こらず、くっついていても単にお隣さんとして暮らしていること、しかし、競争状態になれば負けの方は衰退してしまうことを解説。



アカメガシワの連理木

④「筍(竹の子)の親まさり」、タケの生長が早い理由と、節ごとの生長の観察記録を示し、その生長過程を解説。

⑤「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」、出典の空也上人絵詞伝「山川の末(さき)に流るる椀殻(とちがら)も身を捨ててこそ浮かむ瀬もあれ」のトチの殻と身(実)に着目して水の中に殻の着いた実全体を入れた場合、殻を外して実と殻を分けた場合の浮き沈み実験の様子を説明。

⑥「ナースツリー (ナースログ)」、日本語では倒木更新と言っている現象を欧米ではこのような素敵な言葉で呼んでいる。親木となった倒木に着目するか、その上に生育する苗に着目するかの違いだが、欧米と日本の文化というか感性の違いが興味深い。



アオモリトドマツのナースツリー

⑦「桐一葉落ちて天下の秋を知る」、中国の前漢の時代の書「淮南子(えなんじ)」から。事態の変化の予兆としてアオギリの落葉が取り上げられている。先駆けて、潔く散るということは見事だが、ヤマコウバシの葉のように冬になっても落ちないということも素晴らしいのでは。

今回は、森林に対する知識と理解というよりは、「へー」と感じてもらい、楽しい時間を共有することを目指したつもりです。